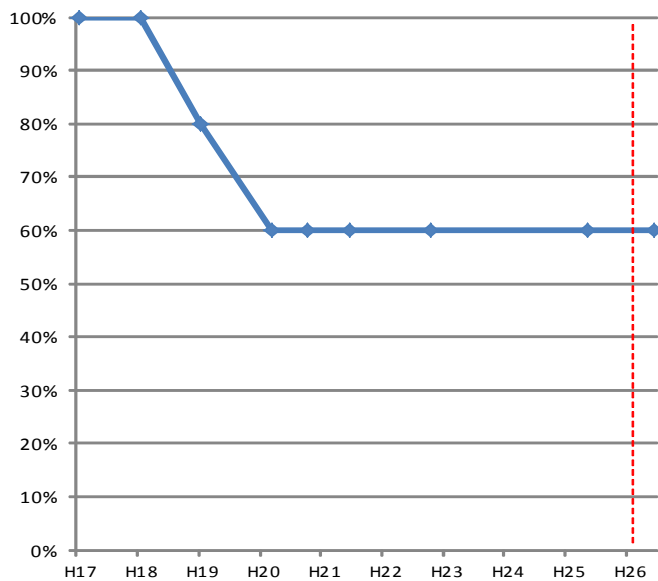


樹種名	モッコク	
科 目	ツバキ科	
学 名	<i>Ternstroemia gymnanthera</i>	
分 布	南西諸島を含む日本列島、国外では朝鮮半島南部、台湾、中国を経て東南アジアからインドに至る暖地の海岸近くに自生する。	
樹木特性	陽樹で照葉樹林内に生育し、乾燥にも強い。	
用 途	公園樹、器具材として利用。	
植栽本数 (植栽密度)	35 本 (他樹種との混植)	
特 徴	【樹 形】 常緑高木で成長すると樹高は約 10m、時には 15m、胸高直径 80cm に達する大木となる。樹形としては直立して、上で放射状に広がる形になりやすい。幹の樹皮は灰淡褐色、皮目が多い。 葉は互生ながら、枝先に集まる。長さ 4~7cm、倒卵状長楕円形、円頭でくさび脚、全体としてはしゃもじ状。分厚くて光沢があり、十分に日光が当たる環境では葉柄が赤みを帯びる。 7 月ごろになると、直径 2cm ほどの黄白色の花をつけ、芳香を放つ。花は葉腋に単生し、1~2cm の柄があって、曲がって花は下を向く。 樹皮が美しく樹形が整うため、庭木として庭園に植栽されるほか、堅く美しい赤褐色をおびる材を床柱のような建材、器具材、寄木細工、櫛（くし）などの木工品の素材として用いる。また、樹皮は繊維を褐色に染める染料として利用される。	  
試験地での様子	ポット苗を植栽し、植栽直後から枯死が発生したが原因は特定できていない。成長量は大きくはないが、順調に推移している。	
被 害	特になし。	

モッコク 現存率



【現存率】

植栽後、2 年目から 3 年目にかけて原因不明の枯死が発生した。その後は順調に生育している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、現存率は 60.0%であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

【根元・胸高直径】

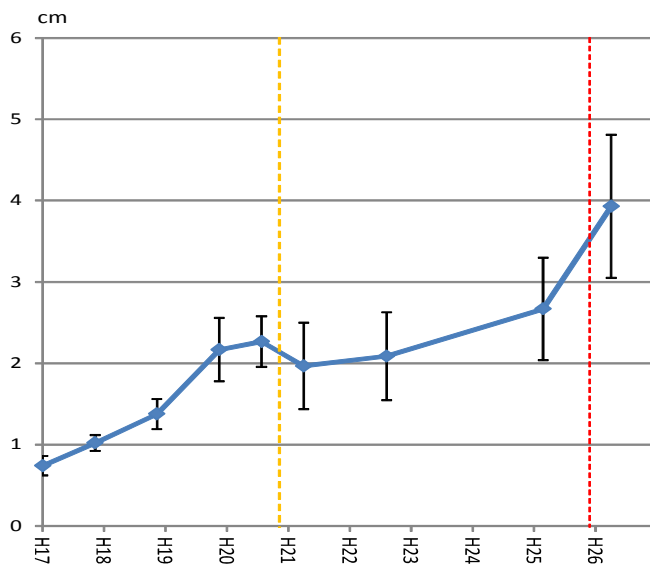
現存木は順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均胸高直径は 3.93 cmであった。

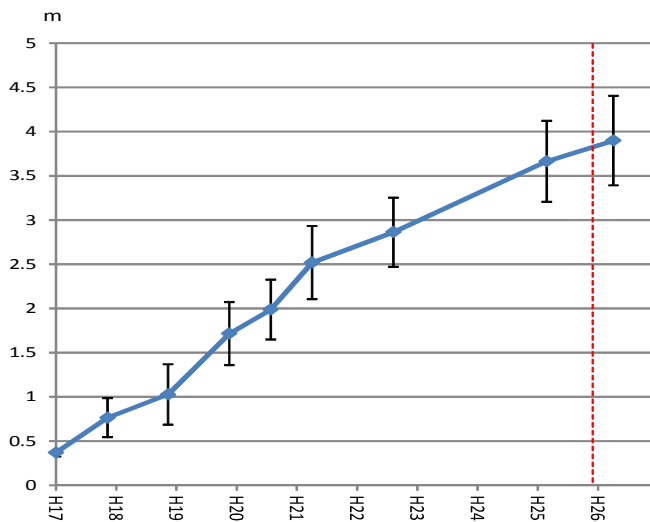
※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。

※ オレンジ線は、根元から胸高へと測定箇所変更のため、データの連続性はない。

モッコク 根元・胸高直径



モッコク 樹高



【樹 高】

現存木は順調に成長している。

平成 26 年度に毎木調査を実施した結果、平均樹高は 3.90m であった。

※ 赤線は、選定した調査木から毎木調査へと測定方法を変更したため、データの連続性はない。



《プチ情報》

モッコク (*Ternstroemia gymnanthera*, (Wight et Arn.) Bedd. (木斛)) は、アカマツ・イトヒバ (サクラの変種)・カヤ・イヌマキとともに「江戸五木」の一つ。このため、モチノキやマツと並び「庭木の王」と称される。民間療法では、葉を集めて乾燥し煎じ出したものを腎疾患や肝疾患に用いる。



株によって両性花または雄花をつけ、雄花の雌しべは退化している。両性化をつける株には 1cm あまりの大きさの卵状球形の果実が実り、秋になると熟してぶ厚い果皮が裂け、赤い種子を露出する。この種子は鳥によって食べられて親木から離れたところまで運ばれると考えられている。また、この種子は樹上で赤く目立つため、アカミノキの別名がある。